

名古屋中村遊廓の建築計画的な研究

その3 中村遊廓の建築意匠

【序】大正から昭和にかけて繁栄した中村遊廓は、その時代の多様な文化様式が交錯する都市の舞台としての役割を果たし、そこには和風、洋風、大正モダン風の独特な意匠が施された遊廓建築が建ち並んでいた。ここでは、得られた当時の資料と現存する建物の実測調査より、中村遊廓の妓楼の外部意匠、内部意匠について考察する。

【外部意匠について】中村遊廓の妓楼の外観については当時の様子が残っているものはほとんど無いが、収集された資料と実測、ヒアリング調査の結果から当時の構造が残っていると思われる44妓楼のうち、和風が18(40.9%)、洋風が15(34.1%)、不明が11(25.0%)ということが明らかになった。

収集された当時の写真から考察すると、営業開始当初は図1、2に示す『新千寿』『新山水』のように妓楼のほとんどが総二階建て入母屋造りで、数寄屋風の造りをした部分をもつものもあった。一、二階の窓には格子が入り、壁は朱色に塗られ、軒先には提燈がぶら下げられるようになっており、昔ながらの遊廓建築が建ち並び、比較的統一した町並みを形成していた。中村遊廓の中で最も有力な妓楼の一つで現存している『稲本』は、中国風の門で紅殻色の外壁の京都祇園の一方茶屋を模した外観である。

昭和に入りカフェやダンスの流行という世相を受けて、ファサードをモダン風や洋風館に改造する妓楼も多くなった。それらは元々の和風建物をそのまま残し、通りに面した部分の庇を切り落としてそこに新たに外壁を取り付けており、そのため外に面した部屋の窓が二重になっていたり、玄関は外壁から少し入ったところに配置されていたりする。図3の『銀波』は二階部分中央に半円形、左右に四分の一円形の大きな硝子窓を有し、周囲を直線と円による独特な幾何学的模様で飾り、小タイルがその外形をなぞるように張り付けられている。この『銀波』に代表されるよ

正会員○ 渡辺 孝一※²同 若山 滋 ※¹同 松村 秀弦※²同 近藤 正一※²

うな表現主義モダニズムの様相を呈するファサードをもつ建築や、当時完成したばかりのライトの帝国ホテルを模して造られた建築もあった。

【内部意匠について】妓楼の内部は、図4に示すように廊下に軒が連なり、各部屋の入り口に底のついた玄關を設け、路地のような空間を生み出し、内部空間を外部空間と思わせる幻想的な空間を創り出している。それぞれ各部屋には独特な意匠が施されており、例えば『稲本』では、露出した梁や囲炉裏など木材質感が生かされている田舎風で、天井に「水」の字に形どら

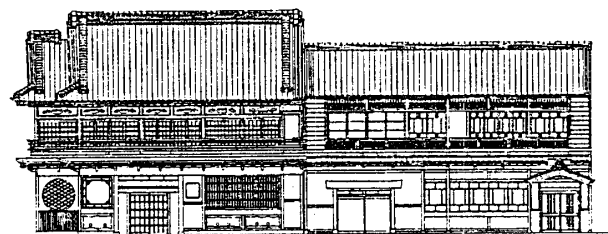


図1 新千寿・新山水 南立面図

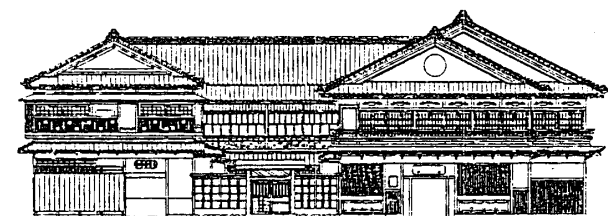


図2 新千寿 西立面図

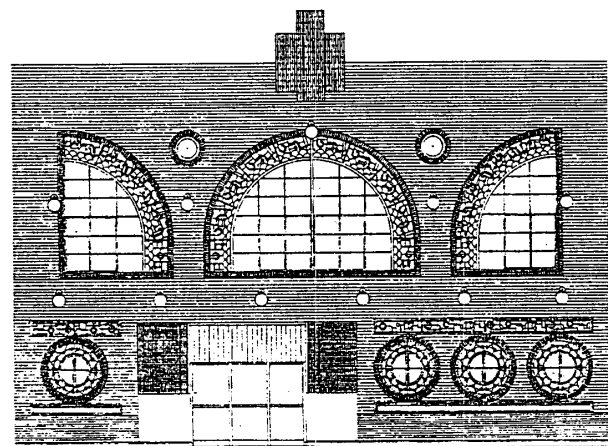


図3 銀波 北立面図

A study on architectural planning and design
for Nagoya Nakamura-yukaku
Part 3 Architectural design for Nakamura-yukaku

5252

Watanabe, Kouichi et al.

れた明かり取りが設けられている部屋（山が家）や、寝殿飾のついた床の間や蓮や菊が描かれている絹地の襖など、すべてが中国風にしつらえてある部屋（妙香閣）などがある。

本研究室で実測調査を行った『新千寿』『新山水』『稲本』『桔梗屋』『銀波』の資料から、内部意匠を構成している要素を天井、床、欄間に分け、形態、素材の面からタイプ別に分類し、構成比のグラフを図6に示す。分類意匠要素別に見ると、畳数においては、6畳が圧倒的に多く、房室の標準的な広さであるといえる。一階は、6畳以外の部屋が比較的多く見られるが、これは広間などの公的空間と次の間付きの部屋が多く置かれていたためである。天井は竿縁型が大半を占めているが、意匠的特異性のある形態をしたものも、多様な形で現れており、天井意匠に関心が注がれていた点が興味深い。『稲本』『桃園』など複数の妓楼には絞りなどの色とりどりの布が張られた八角天井が華やかな空間を作り出している部屋（傘の間）が存在していたことが明らかになっている。床については蹴込み床、床柱は丸柱（滑）型、欄間は開口・板・障子型と素材・格子模様・抽象模様型が多く、部屋を構成する要素で、特異な意匠のものが統計的に見ると割合に少ないといえる。

こうした中で昭和初期に流行したダンスホールやビリヤード、ピンポンなどの遊戯場として使われたと思われる大正モダン風の洋室が重要な役割を果たしていた。

【結】既にモダニズムの時代に入り始めた世相は、イ

メージを消費する風俗建築の代表である遊廓建築にいち早く取り入れられ、当時の流行であったアールデコや表現主義風の意匠でファサード、玄関ホール、階段などを飾った。各々の房室は数寄屋という伝統的方法によって意匠の工夫を凝らしていたものの、洋室や中国風など異国情緒の趣のあるものなど、異界性を醸し出す空間が存在していた。特異な意匠の部屋も置かれた中村遊廓の建築物は、大正末から昭和初期の当時の建築意匠の兆しを敏感に取り込んでいた。日本建築における「モダン」はまずこういう空間から出発したと思われる。

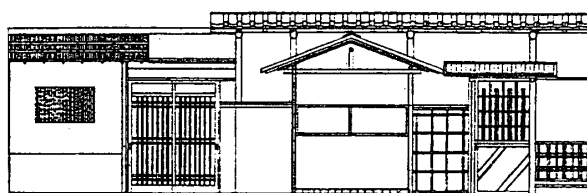


図4 稲本 二階廊下展開図

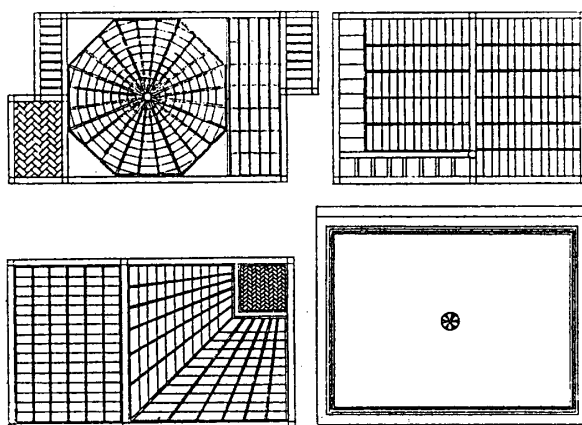


図5 部屋天井伏図例

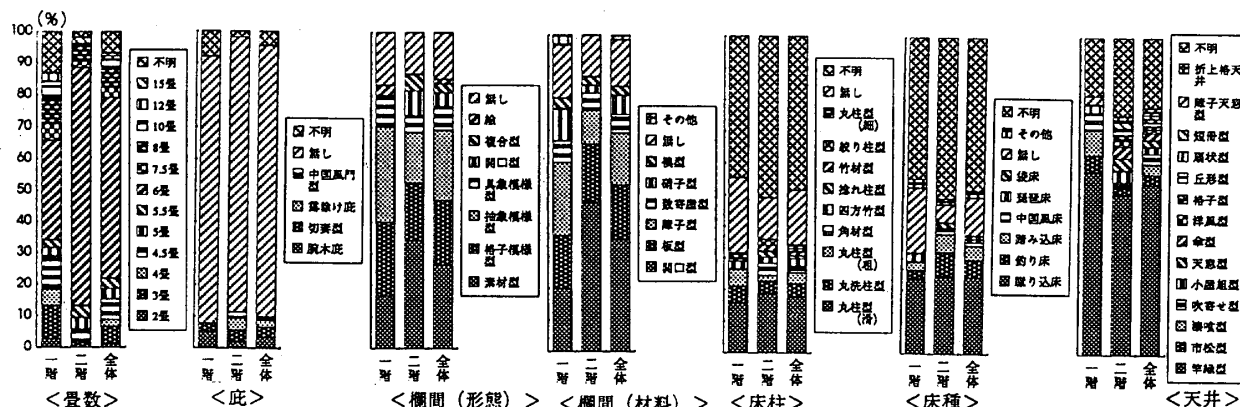


図6 意匠要素構成比 グラフ

※¹名古屋工業大学教授・工博 ※²名古屋工業大学大学院